

(特集) 大学改革の原点を探る

## 大学と先生と学生の改革

山崎香代

「大学で何をしたいか」という質問がしばしば大学生に向けられる。音楽、旅行、語学…、人によってそれへの答え方はさまざまだ。ここで返答内容を観察してみると、質問中の「大学」という言葉が一つの場所として捉えられていることが容易に理解できる。あるいは、何かをする場合の媒体として大学を考へることも可能だ。このように、生徒にとっての大学というのは与えられた環境であることを勘違いしてはならない。

よって、大学が今まさに変わろうとしているとき、より良き教育現場が創造されつつあるという認識の仕方ではなく、学生を取り巻く大学という環境が姿を変えつつあるといった捉え方を、大学も先生も生徒も意識して持たなければならぬのではないかとわたしは思うのだ。その意味で、教育改革の内容に大学制度の改革・先生と学生の意識改革というグローバルな意味合を含ませようと思う。そこで、学生としてのわたしの一意見を、講義、ゼミの大きな2項目に分けて以下に述べていくことにする。

### ①講義のあり方

「授業に出席するか否かは生徒の意志に任されている」と誰もが口にするようだが、それが意味するところを捉え違えてはいけない。興味の無い授業や退屈してしまう授業に出席する必要はないとか、自分を啓発するような行事に参加するためにやむを得ず授業を欠席するとかいうのは正論であるし、大いに授業外の私生活を楽しめばよいと思う。

ただ、ここで注目したいのは、授業が自分に合わない・面白くないと判断を

下す場合の基準と根拠である。履修届を提出しただけで学校にも来ない、期末試験にだけ顔を出す、というような姿勢は鼻から授業を否定しているのに過ぎない。興味を持てるかどうかは、その分野に少しでも触れないことには下しようのない判断である。

それならば、学生は、先生は、学校はどのようにして興味作りに臨むのが良いか。その答えは、95年度から採用されるシラバスを用いての、受講前から予想できる講義内容の呈示が第一に挙げられよう。そのほかの具体案として、ウナギの寝床201教室の使い方の工夫——受講人数に応じて教室の後ろ何列かの席の使用を制限するなど——をすれば黒板の字の見えにくさやそれに伴う講義への無関心の問題はある程度解消されよう。また、出席率の悪さを解決するための強行手段として出席を取るなどのやり方もあろうが、この点については今まで通り先生の方針に委ねるという形で良からう。

そして、興味作りで何より大事な方法は、教育改革が問題とされている今、学生自身が改めて自分の講義に対する姿勢の見直しをしてみることだ。問題意識を持ち、授業への延いては改革問題への積極性を態度に示してみることだ。問題の主体は大学、先生、そして学生なのだ。

## ②ゼミのあり方

ゼミとは何をする場所なのか。一般的な言い方をすれば、ある先生の専門分野に入って少人数で問題を討論する場のことだろう。しかし、ゼミに参加することで何が得られているかを考えるときには、さまざまな回答が出されることだろうし、派生的な問題を解決する必要も生じてこよう。そこで、ゼミによって得られるものを考慮に入れつつゼミの改革の内容を考えていこう。

94年度より2回生もゼミ入りすることとなった。経済にどのような分野があるのか、どの先生がどの分野を担当されているのかなどを分かりやすく示すために、1回生からのガイダンスの徹底と経済論集のあり方の見直しとが、先日の討論会において発議された。わたしはそれらに加え、2回生から3回生への移行の時点で希望者にはゼミの変更を許可する制度を作れば良いと考える。すなわち、2回生という時期は経済への関心を深め連帯感を養う期間とし、3回

生において本格的に専門分野に乗り出していけば良いのではなからうかと考えているのである。

また、経済への関心を高めさせるために、2回生のときから卒論を意識させるような、先生から生徒への働きかけが必要だ。そうすることで、ゼミの討論の内容は、自然と個々人の問題意識を提起するものとなろう。

最後に、現代の大学生に最も欠けている積極性と主体性をよみがえらせるために、討論という形態を決して無くさないでほしいことを付け加えておく。

その他、就職のためのカウンセラーとカウンセラー室の設置などさまざまな要求があるが、あくまでもこれらは大学・先生だけに向けられているのではなく学生にも向けられたものであることを再度ここで強調したい。教育改革は、大学と先生と生徒自身もたらす変革であることを銘記して忘れてはならない。